ふるさとの民話　（第三十三話）

『手洗い石』

明治二十五年生まれの「杉森志げさん」が、子どもの頃を、思い出して、こんな話をしてくれました。

『千野の上出に、兵五郎屋敷というところがあったわいね。そこに、小高い築山が、ひとつあったわいね。今、まわりは、田んぼになっとるけど、その頃は、築山が、ふたつあったがいね。

子どもの頃、あそこで、よう、遊んだわいね。よう、あの石の上で、手まりやら、しっちょこをしたもんやね。

まわりは、藪みたいになっとってね。秋になると、べーずる（むべ）がなってね。欲しくて欲しくて、どんならんだ。

そしたら、大人のもんなあ、とってもいいけど、落ちんとかなあと言うてね…。

よく、その築山のまわりを見ると、ポッカリと穴があいとってね。恐る恐る、中をのぞくと、けっこう、奥行きがあってね。こうもりが、住みついとって、薄気味悪いところやったけど…、こうもりをつかめに、子どもが、よう来とった。

そこは、昔、この中に゛さむらい゛が、隠れとったところや聞かさされたもんや。

ほんとうに、でっかい石ばっかりで、組んだ穴やったね。なんで、こんなでっかい石があるがんか、不思議やったね。

そうやね、明治三十三年頃やったかね。在所総出で、その石を、てこやころで引っ張って、正福院や宮（妙剱白石神社）まで、持っていったげんね。今、寺や宮へ行くと、大きな手洗い石あるやろいね。あれが、そうやがいね。』

そういう訳で、二つあったといわれる千野古墳は、現在の一つになったのです。

（「郷土の民話」より）

しっちょこ	＝	おじゃみ
べーずる（むべ）	＝	アケビの種
どんならんだ	＝	がまんできなかった
つかめに、	＝	捕まえに
よう来とった。	＝	よく、来ていた。→